

スポーツにおける原因帰属因子の特徴

松木 航¹⁾, 粟木 一博

The Characteristics of Causal Attribution in Sports

MATSUKI Kou, AWAKI Kazuhiro

The purpose of this research is to clarify the structure of the causal attribution factor in sports.

As a result of the factor analysis, two factors (an environment and physical factor, and a psychological factor) were found.

In the comparison of the factor scores by sex, the score of psychological factor was significantly higher in female athletes than those in male athletes. In the comparison of the factor scores by sports event, the score of the individual sports event athletes was significantly higher than those of the team event athletes.

Key words : causal attribution, factor analysis, sports

1. 研究目的

原因帰属に関する研究は、Weininger and Kukla(1970)の分類した、能力・努力・課題の困難度・運の4要因を基準にした研究が進められてきていたが、昨今の研究の傾向としてこれらの4要因に限定せず、新たに独自の帰属要因を想定して行われた研究が増えている。

伊藤(1982)は大学のバレーボール実技を受講した学生を対象とした研究で、「課題の困難度」という帰属因子は、従来の研究で取り扱われてきた学習課題での達成場面においては適切だと考えられるが、試合という競争場面では克服すべき課題は相手チームであるとして、

「課題の困難度」要因の代わりに「チーム」要因を加え、能力、努力、相手チーム、運、自チームの5要因で研究を行っている。その結果、従来の帰属因子ではないチーム要因と相手チーム要因にのみ質問紙によって調査された帰属得点に有意差が認められた。このことから、スポー

ツ場面独自の帰属因子の検討が今後必要とされるであろうとしている。

筒井(1992)はBrawley & Roberts(1984)やRejeski & Brawley(1985)が指摘するように、帰属因は能力、努力、運、課題の困難度の4種類だけに限定されることが多いが、スポーツの特性から考えて体調や雰囲気などの他の帰属因も考慮する必要があると思われるとし、帰属要因を従来のまま用いるのではなく、状況に応じて修正し、新たに付け加えた研究を行っている。大学生陸上競技部部員に対して原因帰属に関する調査を実施したところ、成功の原因としては、努力への帰属(30%)、相手への帰属(20%)、体調への帰属(14%)という結果が得られた。また、失敗の原因としては、努力への帰属(47%)、体調への帰属(18%)、能力への帰属(9%)が見られた。この結果、課題の困難度要因を相手要因に置き換えることや体調要因を加える必要性を示唆している。

原因帰属理論とは、自ら経験した成功・失敗

1) 仙台大学大学院

に対する原因認知の類型化を行うことによって動機づけ理論への関連性に関して言及しようとする目的で発達してきた理論である。したがって、原因帰属のさせ方が期待と感情を媒介としてその後の行動に影響を及ぼす（伊藤 2000）ことから、結果が比較的明確に現れ、その後の動機づけが成績に大きな影響をおよぼすスポーツ場면을題材とした多くの研究が行われている。

伊藤（1980）は、自身が行った運動パフォーマンスにおける成功・失敗の原因帰属パターンを検討した研究で、成功後は内的要因に（特に努力要因）に帰属されたものの、失敗後も内的要因に（能力不足）に帰属されたとして、一般に成功は内的要因に帰属し、失敗は外的要因に帰属されるという自己防衛帰属理論（self-serving attribution, Snyder;1976）を支持しないという結果を報告している。同様の結果が Iso-Ahola（1977）、Scanlan and Passer（1980）によっても報告されており、この結果は、能力を重要とするスポーツ場面に特有の帰属パターンではないかと推測している。

このように、専門的にスポーツを実施している者は、競技力向上のために、延いては試合において勝利を得るための専門的なトレーニングを長期間に亘って行っているため、学校体育場面や運動をともなわない学習場面での原因帰属研究の範疇では捉えることができない帰属因子の存在を容易に想像することができる。

同様に出村・郷司（1994）も競技スポーツの場合、教育的営みである体育の授業や学習行動の場合とは異なり、勝つことが最大の目的であり、そのために専門的能力を有する者が長期に及ぶ厳しい練習や訓練を計画的に行う。従って競技スポーツにおける勝敗に対する原因帰属は、必ずしも同じではないとしている。

したがって、スポーツ場面において、これまでの Weiner and Kukla（1970）が提唱している能力・努力・課題の困難度・運の4要因では伊藤（1980）、Iso-Ahola（1977）、Scanlan and Passer（1980）のように説明できない状

況があり、伊藤（1982）や筒井（1992）のように、帰属要因を状況に応じて修正し新しく付け加えたうえで、スポーツ場面における、より適切な原因帰属理論を再検討する必要性が生じることになる。スポーツ場面での敗因に対して、より詳細な分析を実施することが本研究の大きな目的である。

さらに、原因帰属の観点から競技力の向上を目的とした場合、競技者は敗因を正しく認知し、「敗因として認知した要因を克服する」という明確な課題を持って、日々の練習に対する意味づけや、価値づけが十分な状態で、練習へのやる気の量や質を向上させることが望ましい。そうすることにより、次の試合で良い結果が得られると推測される。すなわち、競技スポーツにおいて、次のパフォーマンスで良い結果を得るために重要なことは、「敗因」を客観的に分析し、課題を明確にすることであると考えた。したがって、競技力向上への寄与を考慮し、「敗因」に限定した研究を行った。

本研究ではスポーツ場面において考えられる失敗や敗因を多変量解析的手法を用い、いくつかの要因に分類し、敗因に関する原因帰属の認知構造を明らかにすることを第一の目的とする。

次に、スポーツ場面において失敗の原因として、ある者は自分の能力不足に帰属し、またある者は会場の雰囲気緊張したと帰属するという場面を容易に推測することができよう。しかし、この帰属のさせ方の違いはどこから生じてくるのかと疑問を持ち、専門種目、性別、競技レベルの違いによって、どのような事柄から敗因が構成される傾向があるかということを検討することを第二の目的とした。

2. 研究方法

1) 調査対象と調査時期

平成16年10月下旬に、仙台大学の1、2年生（18歳から22歳）を調査対象とした。その数は209名（男性116名、女性93名）

である。そのうち有効回答とする 177 名、(男性 100 名、女性 77 名) について検討した。

除外した 32 名は、いずれも回答の記入漏れや、その信憑性に欠けるものである。

2) 調査内容

質問紙調査を実施した。質問紙への回答には 5 件法 (1: まったくあてはまらない 2: あまりあてはまらない 3: どちらともいえない 4: ややあてはまる 5: よくあてはまる) の評定尺度方式を用いた。

年齢や性別、競技レベルの違いによって、失敗や敗因となった原因とされる帰属因子に、共通性、または差異が見られるのではないかと考え、フェースシートの構成内容は年齢、性別、専門種目、競技レベル、および失敗場面の自由記述の 5 項目とした。競技レベルへの回答はこれまでに参加した最もレベルの高い大会を記入するという方式にした。さらに、失敗場面の自由記述は一番印象に残っている競技や試合での、失敗した場面や負けた場面をできるだけ詳しく知ることを目的として設定した。

質問項目は、競技者が失敗あるいは敗戦の原因帰属因子と考える項目を、様々なスポーツの場面において想定される敗戦や、失敗の原因となりうる事柄について、スポーツ心理学を専門とする者と、大学院生との 2 名によって 66 個の質問項目を作成し、自由記述部分に記した具体的な失敗経験について質問項目に回答する方法をとった。

3. 結果

質問紙の調査項目 66 項目に対して主因子法 (バリマックス回転) による因子分析をした。スクリーテストを実施した結果 2 因子を抽出した。因子分析の結果を表 1 に示した。表を見やすくするため、0.4 未満の因子負荷量は削除してある。

抽出された第 1 因子は「体調が悪かった」、「移動時間が長すぎた」などの質問項目によって構

表 1 原因帰属に関する質問項目の因子負荷行列

質問項目	F1	F2
項目 27 競技当日、寝坊をした	0.722	
項目 52 使用した道具が悪かった	0.717	
項目 50 試合会場に到達する時間に遅れた	0.675	
項目 44 競技前に食べ過ぎた	0.671	
項目 29 コーチの指示が間違っていた	0.610	
項目 33 照明 (太陽) が目に入った	0.606	
項目 53 起床時からぼんやりしていた	0.597	
項目 56 ユニホームを忘れた	0.595	
項目 19 親しい友人とけんかをした	0.579	
項目 30 恋人と別れた	0.578	
項目 57 競技場までの移動時間が長すぎた	0.553	
項目 58 水分補給がうまくいかなかった	0.536	
項目 37 日常生活全般にやる気がなかった	0.530	
項目 32 疲労のせいで動きが悪くなった	0.520	
項目 28 体調が悪かった	0.510	
項目 51 応援が少なかった	0.480	
項目 59 周りの環境が悪かった	0.480	
項目 6 空腹だった	0.469	
項目 16 体力の限界だった	0.455	
項目 23 道具の手入れができていなかった	0.447	
項目 13 競技前に嫌な出来事があった	0.437	
項目 38 競技場のコンディションが悪かった	0.419	
項目 35 必要以上に力んでしまった		0.788
項目 36 あせってしまった		0.725
項目 34 緊張していた		0.682
項目 7 雰囲気のにめれた		0.637
項目 24 消極的なプレーになった		0.621
項目 62 集中できなかった		0.589
項目 25 失敗したときのことを考えてしまった		0.574
項目 21 準備不足だった		0.526
項目 66 途中であきらめてしまった		0.501
項目 41 ウォーミングアップ不足だった	0.437	0.461
項目 39 種目に対する苦手意識があった		0.454
項目 11 経験が足りなかった		0.451
項目 49 もっと練習をすればよかった		0.427
項目 48 対戦相手に対して苦手意識があった		0.413
回転後の負荷量平方和合計	9.037	6.471
分散の %	17.052	12.210
累積 %	17.052	29.261

成されていたため「環境および身体的」因子とした。第2因子は、心理的な問題に敗因を認める項目によって構成されていたため「心理的」因子とした。

次に、専門種目、性別、競技レベルが原因帰属因子にどのような影響を及ぼしているか検討するため、それぞれの因子得点を比較した。

図1は競技種目別の因子得点をグラフに表したものである。種目によって人数に著しい偏りがあるため、競技種目をカテゴリーに分けて分析を行った。質問項目からもわかるように環境に関する質問項目の中には対人関係に関するものやチームゲーム特有のものが含まれていることから団体競技と個人競技に分けて分析を実施した。分析には二要因の分散分析(性別×因子)を実施した。その結果、有意な交互作用($F=4.15$, $df=1/175$, $p<.05$)が見られ、個人種目における心理的な帰属要因の因子得点が団体種目のそれと比較して高い値を示していた。

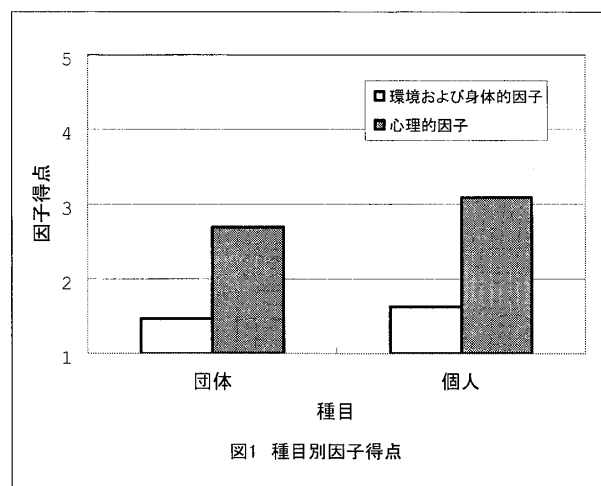
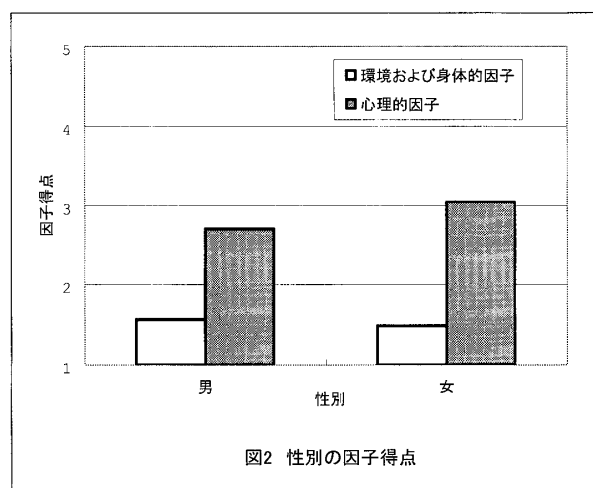
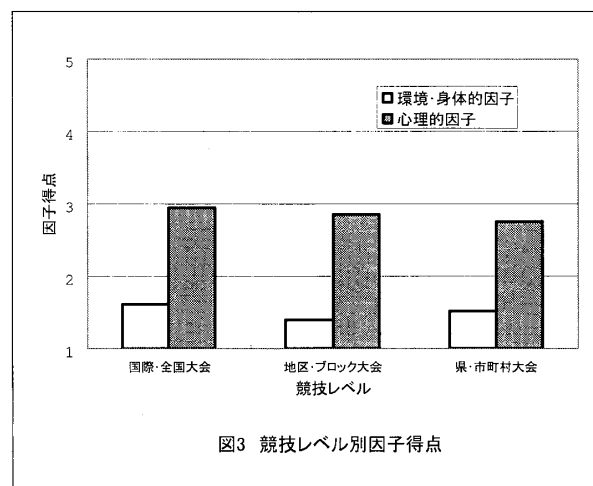


図2は性別による因子得点をグラフ化したものである。二要因の分散分析(性別×因子)を実施したところ有意な交互作用($F=12.72$, $df=1/175$, $p<.001$)が見られた。この結果は女性競技者の心理的帰属因子得点が男子と比較して有意に高いことを示すものである。

図3は競技レベル別の因子得点を示している。競技レベルに関しても調査対象者数に著しい偏



りがあるため、全国大会出場以上のレベル、地区ブロック大会出場レベル、それ以下のレベルの3段階に分けて二要因の分散分析(性別×因子)を実施したところ、因子得点間に有意な主効果($F=487.18$, $df=1/174$, $p<.001$)が見られた。この主効果は環境・身体的因子の得点と比較して心理的因子の得点が高いことを示しているしかし、有意な交互作用は見出されなかった。



4. 考察

1. 敗因に関する原因帰属の認知構造について
質問紙調査の結果からスポーツ場面における競技者の敗因認知として、「環境および身体的」要因と「心理的」要因の2要因を明らかにした。

この2要因により、スポーツの敗因認知の構造が成り立っていると解釈できる結果であった。調査を行うにあたって自分が経験した失敗の場面を自由記述回答することを求めており、失敗に対するイメージがかなり具体的な状況で本質問項目へ回答したという状況が考えられる。そこには課題の分析とその克服という視点がおのずと生じ、それが分析的に自己の敗因を身体的なもの、心理的なものに分けて考えるきっかけとなったものと推察される。また、スポーツに特有な状況として競争の状況が考えられる。これは、そのほかの一般的な学習課題とは異なり、相手や環境を常に意識しなければならないことに他ならない。このことが、自分の内面的なもの(本研究の結果においては特に心理的な因子)と外的なもの(本研究の結果においては特に環境的・身体的因子)に分割されてその敗因が認知された結果であるものと推察できる。

2. 専門種目、性別、競技レベルが原因帰属因子にどのような影響を及ぼしているかについて

性別による因子得点の比較では女性競技者の心理的因子得点が男子競技者のそれに比較して高くなる傾向を示した。これまでの研究において原因帰属に関する統一見解が得られているとはいいがたいが、出村・郷司(1994)によるソフトテニス競技者を対象とした研究では敗因の場合女子は男子よりも精神的不安定や集中力の欠如を原因と認識する傾向が高いことを報告しており、それを追認する結果となった。これは原因帰属に関する性差の存在を示唆する結果であり、今後の検討課題となろう。

種目別の因子得点の比較では個人種目の心理的因子得点が団体種目よりも有意に高いという結果が得られた。団体種目の敗因は多岐に亘ることが容易に想像できる。それは、勝敗を左右する要因が個人種目と比較して非常に多いという意味である。これはあくまでも相対的な例ではあるが、陸上競技の短距離種目のように走る

ということにその運動特性が限定されたものと比較して、野球のような団体球技種目の場合、相手チームの調子、味方のエラーなど外的な要因がその組み合わせ数から考えて数多く存在することになる。したがって、相対的に個人種目の心理的因子への帰属の割合が高まる結果が生じたという解釈が成り立つのではないかと考えられる。

出村・郷司(1994)は競技力の優れる者は敗因を精神の安定・集中力因子とパートナーの能力・調子因子に帰属させる傾向が強いとしている。これと同様に本研究においても競技レベルの高い者は「環境・身体的因子」(外的要因・身体的要因)よりも「心理的因子」(内的要因)に帰属するであろうと考えた。競技レベル別の因子得点の比較を行った結果、「環境・身体的因子」よりも、「心理的因子」が高い得点を示すという主効果は見られたものの有意な交互作用は見られなかった。これは、競技レベルに関係なく、内的要因に敗因を認知するという、競技スポーツに特有な傾向(伊藤, 1982)であると考えられる。ただし、本研究では各競技レベルの人数に著しい偏りがあるため、さらに詳細な検討を加える必要がある。

5. まとめ

本研究はスポーツ場面において、次回のパフォーマンスで良い結果を得るために重要なことは、「敗因」を客観的に分析し、課題を明確にすることであると考える。「敗因」について研究をおこない、敗因に関する原因帰属の認知構造を明らかにすることを第一の目的とした。その結果、「環境および身体的」要因と「心理的」要因の2要因によりスポーツ場面における原因帰属の認知構造を明らかにした。

第二の目的として、専門種目、性別、競技レベルが得られた原因帰属因子に、どのような影響を及ぼしているかについて検討した結果、種目に関しては個人種目の競技者は団体種目の競

技者と比較して敗因を心理的要因に帰属する傾向が有意に高い傾向が示された。性別においては女性競技者が男性競技者に比較して敗因を心理的要因に帰属する傾向が高い結果が示された。また、競技レベルの違いによって原因帰属の違いは見られなかった。

本研究のスポーツ現場における実践への寄与は敗因に対する認知構造を明らかにすることによって競技者の心理状態を把握することが可能になるとともに、それに応じた練習方法や試合に臨む心構えに関する情報を提供できるということであろう。

今後も進化、発展し続ける競技者、あるいは指導者の競技生活への有益な情報提供に寄与するためには、より詳細な分析を行う必要があろう。

biases in the competitive sport setting: An attributional dilemma. *Journal of Sport Psychology*, 2: 124-136.

- 筒井清次郎, 1992, 競技意欲・競技不安と原因帰属の関係, *スポーツ心理学研究* 第19巻第1号, 26-32.
- Weiner, B. & Kukla, A., 1970, An attributional analysis of achievement motivation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 15, 1-20

(平成18年1月20日受付, 平成18年3月14日受理)

参考文献

- Brawley, L.R., & Roberts, G.C., 1984, Attributions in sports: Research Foundations, Characteristics and Limitations. In Silvia, J. M., & Weinberg, R.S. (Eds.), *Psychological Foundations of Sports*. Human Kinetics publishers: Illinois., 197-213.
- 出村慎一・郷司文男, 1994, ソフトテニスの勝敗に対する原因帰属の性, ポジション, 競技年数, 及び競技力の差異について, *体育学研究*, 38: 469 - 485.
- Iso-Ahola, S., 1977, Effects of team outcome on children's self perception: Little League Baseball. *Scandinavian Journal of Psychology*, 18: 38-42.
- 伊藤豊彦, 1980, 運動パフォーマンスにおける成功・失敗の原因帰属に関する研究, *体育学研究* 第25巻第2号, 105-111.
- 伊藤豊彦, 1982, 勝敗の原因帰属に関する研究, *スポーツ心理学研究* 第9巻第1号: 21-25.
- 伊藤豊彦, 2000, 動機づけ研究の課題, *スポーツ心理学研究* 第27巻第1号, 73-82.
- Rejeski, W. J. & Brawley, L. R., 1985, Attribution theory in sports: Current states and new perspectives. *Journal of Sports Psychology*, 7, 77-99.
- Snyder, M.L., Stephan, W.G., & Rosenfield, D., 1976, Emotion and attribution, *Journal of Personality and Social Psychology*, 33-4: 435-441.
- Scanlan, T.K. & Passer, M.W., 1980, Self-serving